

氏 名 濑 田 晓 子
授 与 し た 学 位 博 士
専 攻 分 野 の 名 称 医 学
学 位 授 与 番 号 博甲第 4464 号
学 位 授 与 の 日 付 平成 24 年 3 月 23 日
学 位 授 与 の 要 件 医歯学総合研究機能再生・再建科学専攻
(学位規則第 4 条第 1 項該当)

学 位 論 文 題 目 Radiofrequency Ablation for the Treatment of
Hepatocellular Carcinoma with Decompensated
Cirrhosis
(非代償性肝硬変に発症した肝細胞癌に対する
ラジオ波焼灼療法)

論 文 審 査 委 員 教授 山本 和秀 教授 金澤 右 教授 八木 孝仁

学 位 論 文 内 容 の 要 旨

背景：ラジオ波焼灼療法 (RFA) は早期の肝細胞癌 (HCC) の治療として施行されるが、非代償性肝硬変患者では肝予備能が低下する可能性があるため、しばしば施行されない。
目的：今回我々は、Child-Pugh B/C の肝硬変患者の HCC 治療における RFA の安全性と治療効果について報告する。

方法：Child-Pugh B/C の肝硬変患者で HCC を発症し、RFA により治療を施行した 66 人を対象とし、患者背景、RFA による合併症、肝予備能と腫瘍マーカーの変化について解析した。

結果：全患者のうち 55 人が Child-Pugh B で 10 人が Child-Pugh C であった。Child-Pugh B/C の肝硬変患者の全生存期間はそれぞれ、1 年生存率で 82, 83%、3 年生存率で 47, 31% であった。Child-Pugh B の肝硬変患者において、血清総ビリルビン値 (T.Bil)、アルブミン値、プロトロンビン時間、腹水、肝性脳症は RFA 後 1, 3, 6 ヶ月後で変化は認められなかった。しかし、Child-Pugh C の肝硬変患者においては RFA 後 6 ヶ月後に 6/10 (60%) の患者で血清 T.Bil の有意な上昇を認めた。血胸と食道静脈瘤破裂を 2 例に認めたが、肝予備能低下に関する合併症は認めなかった。

結論：RFA は Child-Pugh B/C のような肝予備能が低下している患者にとっても有益な治療法であるが、RFA 後には注意深いモニタリングが必要である。

文 審 査 結 果 の 要 旨

本研究は、進行した肝硬変に合併した肝細胞癌(HCC)に対するラジオ波焼灼療法(RFA)の有用性につき検討したものである。

Child-Pugh(C-P)スコア B/C の HCC 合併肝硬変 66 例を対象として、患者背景、RFA の合併症、肝予備能の変化、腫瘍マーカーの推移について検討した。C-P B55 例、C-P C10 例で、1 年生存率はそれぞれ 82%, 83%、3 年生存率は 47%, 31% であった。RFA 前後において、血清ビリルビン、アルブミン、プロトロンビン時間、腹水、脳症には変化が認められなかったが、C-PC の患者において、6M 後にビリルビンの有意な上昇を認めた。血胸と食道静脈瘤破裂を 2 例に認めたが、肝予備能低下に関する合併症は認めなかった。

本研究は C-P B/C の肝予備能が低下している患者においても、HCC に対して RFA 治療を行える可能性を示したものである。

よって本研究者は博士（医学）の学位を得る資格があると認める。